

魚病対策指導

見奈美 輝彦，堀江 康浩

昭和60年1月から12月までの病害検査状況は、養殖アユ101件、ウナギ1件（不明）、アマゴ1件（水カビ病）、コイ1件（環境不良）およびスッポン2件（水質悪化）であった。

養殖アユについての結果を表1に示した。ビブリオ病（Ⅰ，従来のもの）は13件（5経営体で前年よりも少なかった。 *Vibrio ordalii*によるビブリオ病（Ⅱ）は、以前にも若干あったようであるが、昨年2件（1経営体）確認され、本年は5件（4経営体）みられた。病魚は全て湖産（大きさ3～75g）で、体表のスレ・出血，胸鰭の出血，眼球の突出などのビブリオ病（Ⅰ）と類似した症状を呈するものもあるが、体表がコブ状に隆起しているものもみられた。1日当りの斃死尾数は10～40尾位／3～4万尾で、特に大量斃死はなかった。連鎖球菌症は57年に若干みられその後はなかったが、本来は10月に1件みられた。魚の大きさは60gで、9月に池入れした湖産であった。真菌症の中で2件は真菌症肉芽腫症であり、他は水カビ病であった。飼料性疾病は31件（16経営体）と多く、過食が主であった。不明の中で、躯幹や腹鰭前方の表皮がだ円形に剥離し筋肉露出した症状を呈するものが4件みられた。

分離されたビブリオ病菌（Ⅰ，Ⅱ）のスルファモノメトキシンとオキシリン酸に対する薬剤感受性およびその類別を表2，3に示した。海産種苗から分離された血清型B型（1株）とC型（6株）は、従来と同様、両薬剤に対し高い感受性を示した。

表1 養殖アユの病害検査状況

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
ビブリオ病(Ⅰ)			8	1			2	2					13 (5)*
〃 (Ⅱ)		1	1		1		1		1				5 (4)
細菌性鰓病			1	3								1	5 (2)
連鎖球菌症										1			1 (1)
真菌症	2	1	2	2	1	1	5						14 (9)
飼料性	3	4	5	5	4	1	4	1	2	1		1	31(16)
その他	3	2	2		2	1	1						11 (7)
不明	2	1		3	3	3	2	2			1	4	21(11)
計	10	9	19	14	11	6	15	5	3	2	1	6	101(23)

* 件数（経営体数）

魚病対策事業に係る防疫会議は8月30日(和歌山市)に、また防疫検討会は12月9日(紀北地域、那賀郡桃山町)・10日(紀南地域、田辺市)に開催した。養殖場の巡回指導は61年4月から62年3月まで62回(28経営体)実施し、また養殖場の観測は14ヶ所で、水温・pH・DO・NH₄-N・NO₂-Nについて行った。種苗の魚病検査は表4に示したとおりで、ビブリオ病菌は海産(2~4月)は14件から3件(B型1, C型2), また湖産(2~8, 12月)は14件から1件(A型)分離された。養殖アユを対象とした医薬品残留検査は、6~7月にオキシリン酸36検体について行い、いずれも残留は認められなかった。

表2 ビブリオ病菌の薬剤感受性

No.	月・日	血清型	SMM	OA
1*	3・9	A	卅	卅
2*	15	B	卅	卅
3	16	C	卅	卅
4	〃	C	卅	卅
5	17	A	—	卅
6	26	A	卅	卅
7	〃	C	卅	卅
8*	27	C	卅	卅
9	〃	C	卅	卅
10	4・8	C	卅	卅
11	7・8	A	—	卅
12	8・5	A	—	卅
13	15	A	卅	卅
14*	〃	A	—	—
15	9・4	A	—	卅
16	2・22	A	卅	卅
17	3・18	A	卅	卅
18	5・8	A	卅	卅
19	7・14	A	卅	卅
20	9・22	A	卅	卅
21	27	A	卅	卅

* 池入れ時

No.1~15: ビブリオ病(I)

No.16~21: ビブリオ病(II)

表3 感受性の類別

薬 剤		血液型		
SMM	OA	A	B	C
卅	卅	2*	1	6
卅	卅	1		
—	卅	4		
—	—	1		

* 菌株数

表4 種苗の魚病検査

月	海産	湖産	計
1			
2	2	1	3
3	10(3)*	3	13(3)
4	2	2	4
5		1	1
6		1	1
7		2	2
8		1(1)	1(1)
9			
10			
11			
12		3	3
計	14(3)	14(1)	28(4)

* 件数(分離された件数)